

## 研究ノート

# 中華民国80年の社会

——『少年大頭春的生活週記』の台湾 人物編——

高橋明郎

## 1 はじめに

台湾のベストセラー作家張大春の『少年大頭春的生活週記』は、民国80年（1991）の台湾社会の動きを背景に話が進行する。この作品の理解には、この年の様々な事件の知識が欠かせない。

筆者は国家中央図書館所蔵の『聯合報』紙のマイクロフィルムをもとに、既に内政編（その<sup>(1)</sup>）社会事件編（その<sup>(2)</sup>）を示し解説したが、今回は人物関係の記事を扱う。

## 2 張学良の帰国

發動西安事變的張學良載譽歸國。對三個月的美國之遊表示很好。

80. 6. 23 ~ 6. 29 《少年殺人電影》重要新聞（P. 2）

### A 人物

張学良は周知のように中国東北部を押さえた軍閥張作霖の長男で、正夫人趙氏との間の子である。清末の光緒27年（1901）の生まれで、漢の興国の重臣張良にあやかろうと学良と名付けられた。以後父の道を追い、軍部で着々と地歩を固めた。張学良

(1) 高橋明郎：中華民国80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政編（その1） 香川大学経済論叢 73巻4号，2001年3月

(2) 高橋明郎：中華民国80年の社会——『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その1） 香川大学経済論叢 74巻4号，2002年3月

は、父の爆死直後、北伐をうたい東北軍と対立していた蒋介石と急遽講和、民國 17 年（1928）末東北軍も青天白日旗を使用するという条件も呑んだ。（所謂「東北易幟」）こうして東北での張作霖勢力を安全に継承すると、わずか2週間後に、張学良は父の腹心楊宇霆將軍と常蔭槐を謀反を口実に官邸で射殺、東北軍閥の勢力を握った。民國 19 年（1930）蒋介石の下に入り、中国軍の副指令となった。しかし、このことで、満洲事変に際しては、もともと親日スタンスだった蒋介石の不抵抗路線の指示によって、みすみす地盤の東北部を失い、抗日の上申を却下されるや副指令を辞任した。その後欧州外遊、民國 23 年（1934）帰国した張学良を蒋介石は対共産党戦線の副指令に任命した。

掃共を抗日より優先する蒋介石の政策は、中国の人間に不評で、張学良は自軍の東北軍の突き上げもあって、民國 25 年（1936）西安で蒋介石を軟禁、一方、西安に撤退していた共産党は周恩來を交渉に派遣、内戦中止の話し合いが持たれた。一応の合意後、張学良は何故か蒋介石が南京に戻る飛行機に同乗、南京で軍法会議にかけられ有罪となった。

その後張学良は、溪口（浙江省）に軟禁され、その後も戦況により国内を転々、民國 55 年（1946）台湾へ移され、台湾内でも井上温泉、陽明山などで軟禁状態が続いた。従って民國 77 年（1988）李登輝総統の招きで皆の前に姿を見せるまで、蒋介石の葬儀以外は張学良の存在は封印状態であった。そのため 88 年に現れた 87 歳の張学良の姿が報道された時は、日本でも、まだ生きていたのかという驚きの反応があった。

## B 80 年の渡米前後の動静

張学良は民國 80 年（1991）3 月よりニューヨークに滞在していたが、6 月 18 日、西海岸で静養中の趙一荻夫人とニューヨークで合流、21 日サンフランシスコに米国機で向かい 26 日台湾に戻った。

6 月 22 日付『聯合報』は張学良と接触した人の話として、彼がニューヨーク滞在中コロンビア大学と「口述歴史計画」を進めていて、既に 1 回 3 時間のインタビューを 5 回済ませていること（張学良が中国語で答え、通訳が英語にして録画）、これは台北及びニューヨークで引き続き計画されていることを伝えている。

歴史の生き証人として彼の回想録をとった企画は以前にもあった。昨年の死去に際して改めて言われたのは、既に李宗仁の回想録などを手がけた歴史家の唐徳剛が1990年に訪台中、張学良側からの接触で台北の来来大飯店で面会、回想録を唐教授がまとめることで合意し作業に入っていたということである。ところが少し作業が進みだすと、当時張学良には国民党政府派遣の護衛がついていたため、この作業自体が漏れて、政府は神経質な対応を示す気配があったという。政府側の一部は、やがてこの作業が進んで西安事變の内実暴露という結果になるのを嫌っていたろうし、まずいことにこの唐徳剛という人物は大陸政府に共感する人間と分類されていて、彼の書いた『李宗仁回憶録』が出版禁止、持込禁止扱いになっていた。このため二人はそれ以上作業を進めることを断念せざるを得なかった。

従って、この時のコロンビア大学での張之丙講師を中心とする聞き取りが貴重な機会となったわけである。今度も唐徳剛が関係し、コロンビア大学を紹介、学長からの依頼を承諾する形でこの作業が行われた。<sup>(3)</sup>そして1996年10月、この作業の完成が『亜洲週刊』で報じられた。

マスコミなどの前に解禁された張学良の当時の動きを、96年にまとめられた年表で追ってみよう。<sup>(4)</sup>

民國75年(1986)は、件の西安事變50周年に当たり、内外でこの事件の再検討が開始された。9月、米国チャールストン大学が、米国国立国会図書館の王冀教授の主催で50周年記念の学術検討会を企画し、10月にはイリノイ大学でも国際学術討論会が開催され各国研究者が参加、中国でも各地で記念大会が開かれる。張学良は、この事件の当事者であるから、再び着目され、米国華僑紙は、台湾政府に軟禁解除を求める社説を載せた。

77年(1988)1月に蔣經國総統が死去したのに伴い、13日榮民総病院に弔問のため

(3) この経緯については、1988年唐徳剛が軟禁中の張学良に呼ばれて、その軟禁の場所で取材が開始されたこと、東北出身の張学良と安徽省合肥の訛りの有る唐氏のコミュニケーションが困難を極めたこと、活動がマスコミに漏れて中断を余儀なくされたこと、この91年の訪米の際には、3月30日会食したときコロンビアの黎安友教授等関係者を紹介、この人たちが自ら張学良に交渉したことなどが唐徳剛のインタビューでは答えられている。(鄭重：唐徳剛與張学良口述歴史：『萬象』4-3)

(4) 蘇鄧基『張学良生平年表～東北少帥榮枯浮沈實録』遠流、1996、臺北

姿を現した。その後米国の大学からの招請があり、また米国から慰問団を派遣する動きがあったが、これに対して3月公開書簡を発表し、自ら軟禁生活にあることを否定<sup>(5)</sup>した。

しかし、これほど公衆の面前から消えている重要人物が自由な状態であると信ずる者は少なく、彼の解放・自由化を求める動きは更に強まり、新しい李登輝総統に対し米国の団体が手紙で解放を求めた。政府としては、本人不拘束を対外的に明らかにする必要が高まり、同じキリスト教徒の李登輝総統がクリスマスを祝うため夫人ともども官邸に招いてみせ、張学良もそれに応じて官邸に出向いた。しかし米国の中国系の人々はなお慰問団を送ろうとしたため、78年（1989）には、張学良は二度にわたってこうした動きを制している。

民國79年（1990）、張学良は九十歳を迎える。様々な祝賀が内外で開かれた。圓山大飯店でのパーティーでは宋美齡も花輪を贈り、李登輝総統も祝詞を寄せ、張学良はスピーチをした。これに先立って國民代表数十名が李登輝総統に対し、彼を総統府資政に任命するよう進言、また大陸に残っている盧廣績ら親族は、大陸に里帰りするよう招き、大陸の鄧穎超女史も祝電を打ってきた。年末には楊尚昆中国共産党首席と江澤民総書記が関係者を人民大会堂に招いて事變の討論会を開き、そこで張学良を称賛した。

一方先のスピーチでも当たり障りのない注意深い発言をしてきた張学良に対し、6月中旬NHKが初のインタビューに成功、そこで彼の若年、父の爆死や東北易幟についてもかなり詳しく語らせることができた。しかし、問題の西安事變については相当に控えたことしか聞き出せなかった。

こうしてマスコミの前に意見を示しだした張学良は、この小説で触れられている民國80年（1991）3月10日訪米、当時は、このまま中国大陸へ戻るのではとの憶測もあった。11日にサンフランシスコ（舊金山）に到着し、4月にはコロンビア大学で中国専攻の学生と会い、5月にはラジオ番組の取材も受けた。そして5月31日、米国各地からの来賓とともに91歳の誕生日を祝ったのち、6月26日台北に戻った。

---

(5) 「本人與内子日常生活行動一向自由，並無受到任何限制，亦不願改變目前寧靜之生活」  
（3月26日付『中國時報』，注4書引）

西安事變は、大陸側で評価の高い事柄であり、人民共和國政府は張學良については大きな関心を示してきた。国民党側では長く「叛将」扱いだった張学良であるが、共産党側からすれば、その命脈を保つのに力有った抗日の英雄である。出身地瀋陽には旧居が「少帥府」として保存されていたともいう。そして軟禁解除後は何度も里帰り要請が大陸側から持ちかけられ、本人も関心を示した時期があったが、結局再び大陸の地を踏むことはなかった。

大陸の台湾研究会がまとめた『台湾一九九一』という台湾分析書はこの年の重大事案の一つとして、この一事を取り上げている。<sup>(6)</sup>

なおこれ以後の動きに触れておけば、9月に人民日報、中央電視台など大陸メディアの取材を受け、以後大陸東北部の各所大学の名誉職を幾つか受けることになる。

民國 82 年（1993）8 月末脳出血で台北の榮民總病院に入院、手術後回復、12 月再びアメリカの親族を訪ねている。

民國 83 年（1994）張学良夫妻は米国のグリーンカードを手に入れるとハワイ移住を決意、翌年ホノルルに居を構えた。

そして民國 89 年（2000）6 月 22 日百歳の張学良は趙一荻夫人を亡くした。

### C 死亡と回想録

翌 90 年（2001）世界は再び張学良に注目することになった。既にコロンビア大学での口述作業について触れたが、101 歳の誕生祝いに合わせて、コロンビア大学がこれらの記録と、寄贈を受けた書簡、日記などを公開することになったのである。

9 月 28 日肺炎による呼吸困難でホノルルのスタルヒン病院に入院、生命維持装置をつけたが、10 月 10 日一時人工呼吸器を外すまでには回復した。しかし 12 日に血圧が下がりだし、家族は鎮痛以外の治療を辞退、14 日夜 8 時 50 分永眠した。この間、『北京青年報』や『開放日報』といった大陸紙も病勢を報道した。また国民党は連戦主席が 15 日弔電を打ったほか、同党駐ハワイ幹部に葬儀の助力を命じた。

問題の回想録は、予定通り公開されたが、特に痛烈に蔣介石を批判した内容で注目

(6) 中国友誼出版公司、北京、1992、「張学良離台赴米探親」326 頁

を集めた。これは少なくとも生前の張学良が、蒋介石に対して穏当な態度と発言に終止していたことと大きな対照をなしたものである。問題の西安事變について蒋介石が発表した記録が嘘八百であるとか、蔣經國はまだしも台湾に功績があったが蒋介石はゼロ、晩年の蒋介石の考えは袁世凱そっくりで皇帝になろうとしていたなど、数千頁の回想録中積極的な評価は皆無に等しいありさまだった。

張学良のこの回想録は、20世紀を生き抜いた貴重な証言であるが、一方聞き取り者が米国にいた人間だったためか、特に固有名詞のミスが目立つこと、それとは別に90歳を超した張学良の、明らかな思い違いと見られる面が散見されることなどが、公開から時をおかずに指摘され出した。従って、回想録の内容の信憑性については、なお丁寧な分析が必要となるであろう。

### 3 蔣孝武急逝

蔣孝武因心臟衰竭病逝於榮民總病院，享年四十七歲。

80.6.30~80.7.6 《呉老師没収「蕎麥皮」》重要新聞（P.5）

#### A 死去の経過

蔣孝武は、蔣經國前総統の長男で、蒋介石の孫に当たる。蔣家のプリンスと言われた彼の死は、その年齢の低さに加え、あまりに突発的な出来事だっただけに、当時の台湾に非常に大きな衝撃を与えた。7月2日付『聯合報』は、駆けつける章孝勇、章孝慈、蔣孝勇らの写真、悲しむ未亡人や子供の写真を載せた。<sup>(8)</sup>

蔣孝武は民國80(1991)年6月30日夜9時頃不調を訴えて榮民總合病院(以下「榮總」)に入院、薬物投与で軽快したが、翌未明呼吸、心拍が停止しているのが発見され、5時45分死亡が発表された。夜間で家族も周りにおらず、3時、4時半の看護婦巡回でも異常がなく、5時半の巡回で急変が発見されたものである。

(7) 唐徳剛のインタビューでも、この口述記録者の選定にコロンビア大学内で確執があったことや、中国語のレベルの問題もあって、最初に作業した人たちがまとめたものの出来映えに張学良が失望したことなどが触れられている。

榮總病院では蔣孝武の病歴、これまでの簡単な治療経過、今回の死亡経過を発表したが、それによると蔣孝武は 82 年から高脂血症と糖尿病を発病、インシュリン投与で小康を保っていたが、加えて慢性膵炎があり急性発作もあって、その都度榮總で治療を受けていた。今回は高脂血症と糖尿病からくる動脈硬化があつて、それが心筋梗塞を引き起こし心不全に至ったものである。しかし、あまりの急死に「薬物過剰投与のせいかな？ 榮總は否定」との見出しも見える。<sup>(9)</sup>

蔣家では、この突然の悲報に、まず蔡惠媚夫人、継いで母の蔣方良女史が榮總に駆けつけ、また叔父に当たる蔣緯國、弟の蔣孝勇、叔母の蔣徐乃錦、異母兄の章孝嚴(外交部政務部長)、蔣孝慈らも現れた。生憎シンガポール留学中であつた息子友松・娘友蘭の二人は急ぎ中華航空にのり午後 3 時 20 分頃桃園空港に到着、4 時半頃には榮總に着いた。こうして親族が揃い、午後 5 時 20 分夫人や子供たちの手で遺骸が榮總の懷恩堂に安置された。

彼は当時既に公職になつたとはいえ、言わばオーナー一族の血筋と、つい半月前まで台湾の駐日代表を務めていた現役の人間であつたため、政府も対応に追われた。榮總には李登輝総統、郝柏村行政院長(首相)、宋楚瑜国民党中央党部秘書長らが甲問に訪れ、<sup>(10)</sup> 総統の指示により、葬儀は中央党部により処理される運びとなつた。

(8) 7月2日同紙のこの件についての主要な見出しを拾っておく。ゴチックは主見出し。  
 トップは一面の「**蔣孝武突然逝**：患有高脂血症及糖尿病十年，榮總推斷舊疾引發心臟衰竭；李總統・郝院長等首長獲悉分赴榮總慰問家屬，國民黨中央黨部協助喪葬事宜」以下順不同に「**下半生他本想追求尋常百姓生活**」「**四兄弟遺憾的聚會**：猝逝前一天約好了，惜僅孝嚴有空」「**蔣方良最是傷心人**：短短三年半，失去丈夫・兩箇兒子」「**蔣孝武會數度請辭未獲准，立委要求外交部解釋**」「**慧濟寺簡單設靈堂**」「上周五聚餐，脫大衣曾有困難。**立委惋惜，他剛想做…：中共幾次請他“回去”，但他對臺灣感情深厚**」「**中星中日邦交，分別推上高峰：蔣孝武辦外交有擔當**」「交接會場布置妥當，新人永遠等不到了。**易顯秋續擔任華視董事長：代董事長新董事長連病逝，狀況特殊**」「**蔣孝武猝逝：昔日長官震驚惋惜**。章孝嚴提及遺言，葬禮決不辦公祭，只辦法事」「**明天見**：孝武孝嚴竟成永別，前天最後的聚會語談兩小時，孝慈悔痛有事無法前往」「**蔣孝武的兒女：友蘭友松兼程回臺，乍見親人抱頭痛哭**」「**蔡惠媚 16 歲心儀“蔣二公子”**：緣起或許不晚，緣滅却嫌太平」「**最不平母親未受照顧・尊重**，蔣孝武鮮為人知的一面，康寧祥撫痛近憶」「**慧濟寺設置靈堂，法全超度蔣孝武**：遺孀子女步上百段階梯上香，靈位依禮不能與其父・祖並列」「**天母慧濟寺大殿沒有兩位蔣總統靈位：從宮廷子弟到佛門弟子：蔣孝武和性海法師結緣廿年**」「**中共新華社昨報導死訊：“民革”副主席賈亦斌希望蔣方良女士節哀**」

(9) 「**藥劑過量，榮總：不會吧。根拠過去胰臟炎發作的藥量用藥**」

## B 葬 儀

宋楚瑜は午後にも二度榮總を訪れ遺族と葬儀について協議、国民党中央委員会秘書処の呉水霊主任に葬儀関係の手配を命じた。呉水霊は章孝嚴と会談、章孝嚴自身が4月に訪日した際、健康が悪化していた蔣孝武は、もし何かあったら大袈裟にせず、葬儀委員会も作らず公式葬ではなく、通常の仏教式の葬儀を望んでいたことを聞き、直ちに総統府の馬樹禮や宋楚瑜・宋心濂（国家安全局）と協議、蔣孝武の遺志を尊重して葬儀委員会を作らず仏式に施餓鬼を行い、ただ雑務は中央党部秘書処と中広公司が行うことを決定した。

場所は蔣經國及び蔣孝文の法要が行われた台北市天母の慧濟寺を検討、当初同寺が高台にあるので、高齢者の便を考えた遺族は暫時榮總懷徳堂に靈堂を置くことにしたが、結局住居近くの慧濟寺に仮靈堂を設置して通夜に入った。

蔣介石、蔣經國はいずれもキリスト教徒であったが、蔣孝武は熱心な仏教徒であったため、祖父や父の施餓鬼法要を行った慧濟寺に靈堂が設置された。慧濟寺では2日9時から読経を開始、10時には蔡惠媚夫人が二人の子供を連れて現れ焼香、先に亡くなった蔣孝武の兄孝文の妻蔣徐乃錦と抱き合う姿が目撃されている。腹違いの兄章孝嚴の贈った花輪には「孝武吾弟」「兄孝嚴」と記されていたといい、二人の仲を外部に示したものであろう。

蔣孝武が大使として活躍したシンガポール関係では李光耀（リー・クァンユー）前総理、呉作棟総理、李顧龍副総理兼貿工部長、王鼎昌副総理、宋彼得国家発展部・内政部政務部長、黄根成外交部長、楊林豊国防部長ら高官たちの花輪も並んだ。慧濟寺住職の性海法師が前日に蔡惠媚夫人と協議し、四十九日施餓鬼、七月七日には「頭七（初七日）」を行うことを決定した。蔡惠媚夫人は、祖父や父と位牌を並べられるか尋ねたが、二人の元総統の位牌は大殿にあり、古代の天子の並べ方に拠っていて、礼法上そこに蔣孝武の位牌は並べられないという答えで、慧濟寺信徒のための功德堂に配置するか蔣家に祭るかのどちらかとされた。

(10) 他に弔問した主要な党、政、軍幹部や著名な友人は翌7月2日付『聯合報』報道によれば、馬樹禮（亜東協会長）・黄尊秋・錢復（外交部長）・陳履安・許歴農・宋心濂・劉安祺・王必成・謝深山（国民党中央常務委員）・黄主文、祝基澄（国民党文工会主任）ら



祖母にあたる宋美齡の動向にも再び関心が集まった。蔣孝武の兄蔣孝文の葬儀には現れなかったからで、姜必寧榮總副院長は宋美齡女史に伝えたと表明しているが、改めて彼女の健康状態に関心が持たれることになった。

### C 死去の波紋

『聯合報』は2日付で、数人の立法委員（蔡壁煌、蔡奮門、謝深山、劉松藩、曾芙美、李勝峰、郁慕明）の驚きの声を拾っているが、中で曾芙美委員が、集思会メンバーが6月28日院内会派の集思会顧問につくことになった蔣孝武と、彼と交代した許水徳新駐日代表を招いて会食した際、コートを脱ぐのも大儀そうだった、と述べていること、李勝峰委員が、蔣孝武の今回の駐日代表辞任と帰国は南部の医師の治療を受けるためだったと述べていることが注目される。

また新聞は蔣孝武の前日の動静にも紙面を割いている。

駐日代表を退いた蔣孝武は、中華電視理事長に招かれ、正に死去の当日新旧引継ぎ式が行われる予定であった。

死去前日、蔣孝武は蔣家縁の圓山大飯店に武士嵩中華電視社長を招き、業務の説明（中華電視の重要事業：テレビ製作用ビル建設や中華電視創立20周年建国80周年式典など）を受けたほか、2日後の就任式プログラムやスピーチの順番などにも関心を示していたという。蔣孝武は、外交の職から離れたが国家に対する責任感はなお有り、中華電視の発展にも尽力したいと述べた。

しかし皮肉なのは、この会食で武士嵩との間で健康法について話題になり、蔣孝武が血糖値も下がり最近糖尿病も好転していると述べたこと、武士嵩に早起きしての登山を健康法として勧められ大いに共感したと報じられていることである。

二人は2時間の歓談後「明日また会いましょう（明天見）」と別れ、会社では総務課総出で引継ぎ式の会場を設置していたが、翌日逝去の報にすぐ撤去された。死去当日午前の定例政策会議では情報が入らず、NHKの取材で初めて事態が発覚、会議終了前によく武士嵩社長が事実確認するという、報道機関としては些か困った混乱ぶりであったという。易頸秋理事長は書類上退任しているが、引継ぎの数時間前に蔣孝武が死去し、しかも前日には理事長代理の陳茂榜常務取締役が急死していたため、

易頸秋が急遽臨時理事長となることとしていたが、同日夕刻には正式な理事長として復帰することが発表された。

死去前日の夜は、午後5時腹違いの双子の兄章孝嚴外交部次長が黄美倫夫人とともに天母の自宅を訪問、章孝嚴の弟、章孝慈、実の弟蔣孝勇と、一同揃って会食予定だった。しかし東呉大学副学長の章孝慈はハーバードのクラーク法学部長接待のため急に参加できなくなり、蔣孝勇も急用で来られず、結局二人の会食になった。蔣孝勇は独特の性格の持ち主だったため、蔣孝武は最近では章孝嚴と近く、腹藏ない関係だったという。蔣孝武はこの会談で、中華電視理事長に就任したら管理方式を変更することや番組構想まで披露して非常に意欲的だったと、章孝嚴は取材に答えている。

蔣孝武は駐日代表辞任の約一月前の4月、亜東関係協会駐東京代表処で『聯合報』記者のインタビューに応じているが、その内容は今後の蔣家の有り様、つまり特別な家ではなく、普通の資格で活動をしてゆくという方向を現しているように思う。

インタビューで蔣孝武は、77年1月に蔣經國総統が死去した夜、子供に「**從這一刻開始，我不再是元首的兒子，你也不再是元首的孫子，我們都要開始做普通平民。**（今からは私は国家元首の子ではないし、お前も国家元首の孫ではない。平民として歩み始めねばならない）」と言ったと明かしている。実際このあと彼が取ってきた行動は、むしろ国民党が蔣家の私党的面をどんどん弱めて行くことを、側面から支持していたかのようである。それは例えば李登輝総統のシンガポール訪問でのお膳立てといった外交公務面での活躍（皮肉なことに、こうした成果は、一部の人にはポスト李登輝への実績作りと見られて期待もなかなか冷えなかった）、あるいは野心ある蔣緯國の出馬準備への批判と、蔣經國の遺志である「蔣家人不接班（蔣家より総統は出さない）」という路線を守り切った。

駐日代表の辞任は、自身の健康上の理由だけでなく、老いた母親への孝養を尽くしたいという思いからでもあった。蔣方良女史への扱いが蔣經國の死後粗略すぎると感じもし、加えて蔣方良がいまだ經國の死を理解できずにいる状況もあった。

また、蔣孝文、蔣孝武が相次いで若死したことで、蔣家3代目の最後の一人蔣孝勇の健康状態も懸念された。しかし姜必寧副院長は、特に健康上問題にされる状態ではないとマスコミに表明している。

またこの問題は国会にも飛び火、王志雄立法委員は、数度に渡る辞職願いを受理しなかったことについて説明を求め、合わせて在外職員や幹部官僚の健康診断義務づけを主張した。また当時立法委員だった陳水扁(現総統)は、健康診断結果を公表し、官僚が健康上の辞任を求めた場合無用の憶測を招かないような措置が必要だと指摘した。

#### D 晩年の功績

彼の最後の主要な仕事は外交であった。蔣家という家柄がフルに活かせる外交の場に75(1986)年2月から参与した。最初は駐シンガポール副代表で、これ以後蔣家での仕事ではなく官僚としての仕事が始まった。2年のキャリアをもとに77年8月李登輝総統の指名により駐シンガポール代表に任命された。オーナー家の後を継いだ責任者に、オーナー実子の蔣孝武は、実直に仕えたと言える。国交のないシンガポールからの高官招聘に数度成功、そうした努力は、78年についに李登輝総統訪星に結びついた。中華人民共和国とシンガポールの正式な国交樹立(79年)に先んじて元首訪問を実現させ、これが台湾とシンガポールの密接な関係の呼び水となり、やがて盛んな企業投資につながっていく。

しかし、この実績を元に次に任命された駐日代表のポストでは、十分な成果を収めたとは言えない。シンガポール時代とは違い、既に台湾との国交断絶と、中華人民共和国との国交樹立という状態にある日本との折衝では、必ずしもうまくゆかなかった。経済面では中日信陸会を台湾側に用意し、150人近くの日本の財界人を訪台させたことが功績と言えるが、本業外交ではむしろ強硬的で、72時間ビザ免除中止や釣魚島問題では日本に対し強い姿勢で終止した。

外交畑の人々は、最後まで現役の蔣孝武に接していたため、とりわけ強い衝撃を受けた。外交部長の錢復や亜東協会の馬樹禮会長らは一様に故人の対外関係への貢献を指摘しており、『聯合報』も次のように肯定的な評価を記している。

**這麼一位一直想把事情做好的長官竟然這麼年輕死過去，令人遺憾，也是國家的損失**（このようにかねて事態をきちんと処理しようとしていた高官が、こんな若さで亡くなるとは、国家の損失である）

蔣孝武の死に対する海外の反応であるが、中華人民共和国では新華社電が当日死去

を伝えた。『聯合報』は「中共新華社昨報導死訊（中共新華社，昨日死亡を報道）」の見出しで、香港経由の情報として伝えた。また賈亦斌民革中央副首席の哀悼の意も伝えている。

つい一月前まで彼が駐在代表だった日本でもこのニュースは驚きをもって迎えられた。麻生太郎衆院議員等4人は3日には訪台、また親台湾の組織である日華懇談会は佐藤信二幹事長、藤尾正行会長が7日の葬儀に参列することを早々と決めた。

### E 蔣孝武死去のもたらしたもの：蔣家のイメージの変化

彼の死は一つの大きなイメージを台湾にもたらした。それは「蔣家の没落」である。事実上、蔣經國が総統の世襲を否定した時から、蔣家の絶対は消えていたとはいえ、一般の心情はやはり蔣家に侵しがたい権威を感じていた。

蔣孝武は次男とはいえ、蔣經國にとってやはり家名を高めるであろうプリンスと期待する存在であり、だからこそ林語堂をはじめとする名士が彼の少年時代には家庭教師についたのである。兄蔣孝文は幼なじみであった隣家の娘で、ドイツ人の母を持つ徐乃錦と結婚した。蔣家の嫁として最高の学歴を誇り英、独、仏など4か国語を操る彼女は、将来総統夫人となることがあれば、最も力を発揮したであろう人物である。蔣孝文も米国留学を終えると父の指示で国民党桃園支部の委員、台湾電力孫運璿社長の指導で力をつけた<sup>(11)</sup>。しかし結婚後10年ほどで、蔣孝文は遺伝性の糖尿病がある上酒癖も悪く、やがて人事不省となって小児レベルの知的水準しか持たなくなった。蔣經國の死去まで20年近く命は長らえたが、父の死の2年後喉頭癌で死去した。

従って蔣經國にとっては蔣孝武がまず後継として期待すべき人材であった。本来は内政を蔣孝文に委ねるとしたら軍をもう一人の子に押さえてほしいという思いはあったであろう。しかし蔣孝武自身は軍事に無関心で政治学を学び、26歳で蔣經國から補導会顧問を任されるのを手始めに国民党中央工作委員会、中央党部秘書などの党務で経験を積み、また中央広播電台や、広播事業協会といったマスコミ関係のポストにも就いた（これが死去直前の中華電視理事長就任要請へと繋がる）。そしてその延長として情報部門への展開もした。蔣孝武は蔣經國後継者レースの先頭を走っていたので

(11) のちこの功績により孫運璿は行政院長（首相）に抜擢される。

あろうが、「江南事件」が全ての計画を崩した。海外から巻き起こった非難、情報部門である程度力を持っていた蔣孝武は疑惑に包まれた。「江南事件」<sup>(12)</sup>について立法院で喚問を受けた際、彼はこの事件には誤解があるが弁解したくないと答弁した。

この事件は蔣孝武に非難が集中されたことで、蔣經國が関与したかは謎のままになった。守られた蔣經國は、しかしこの事件のために蔣孝武を平和裡に後継指名する術を失ったのである。

それでも蔣孝武は、国民党の老臣たちにとっては蔣經國の血をひく、毛並みのよいプリンスに違いなかった。だから李登輝が臨時総統から正式な総統へ、または総統に就くより難航した国民党首席になる際に、常に蔣家の意向を口実に本省人をトップに据えることに反対する動きがあり、実際蔣緯國などはよく当て馬のように名前が取りざたされた。蔣孝武は賢明にも、こうした動きに距離を置いたが、前述のように外交での実績は蔣孝武ら蔣家第三世代への勝手な期待を繋ぎ止めていたとも言える。そうしたことは、彼の死によって全て無くなってしまったのである。

直系の最も期待された人物の夭折は、この時期不幸が次々蔣家を襲ったスピードを改めて国民に感じさせる事態であった。3年前の蔣經國総統の死去、次いで蔣孝文が死去し、ついには孝文の弟蔣孝武まで亡くしたのである。短期間に夫と二人の子供を失った蔣方良（經國未亡人）が車椅子姿で榮總に現れ涙を拭う姿がテレビで再三放送されたことも、国民にある衝撃を与えていた。『聯合報』は7月2日付コラム「黑白集」で、李登輝総統の下でより自由になったマスメディア、特にテレビが家族の悲しみをそのまま伝えたことが、蔣家の神秘性を殺いでしまった点をすどく指摘している。<sup>(13)</sup>

(12) 劉宜良は蔣經國の古くからの部下で民國 56 (1967) 年アメリカ駐在の記者として派遣された。蔣經國の身辺に仕え、家庭事情にも詳しい劉宜良は、江南のペンネームで『蔣經國傳』を刊行、これに暴露本のような嫌悪感を覚えた蔣家もしくはそれに近い人々は、台湾情報局を通じてヤクザの「竹聯邦」構成員陳啓禮らに、サンフランシスコで劉宜良を刺殺させた。当時、情報部局に関与していた蔣孝武が、この事件に深く関わっていたと言われた。

(13) 「過去、政治資訊不够暢通，國人曾認為蔣氏家族是神秘的。可是這次蔣孝武先生之逝，人們在電視上分明看到：其叔・其妻・其弟的哀悼。尤其，白髮蒼蒼的母親方良女士悲戚的面容・抽泣的肩頭，令人愴然。正是在真情流露的時刻，人們看到了蔣氏家族的感性的一面，平凡的一面」

また遺体が安置され法要が行われた慧濟寺で通常の警備体制が取られ、また前述のように位牌の特別な配置もされなかったことも、蔣家はこの三代目から平民化したことを国民に示す結果となった。

結婚後5年で夫蔣孝武との死別を迎えた2番目の夫人蔡惠媚は台中の商家の出で、小学校卒業後米国留学、パンアメリカン航空勤務後蔣孝武と出会い、先妻との子友松の家庭教師として蔣家に入りし、75年（1986）駐シンガポール大使の任にあった蔣孝武と秘密結婚した。このように台湾人を妻としたことで、彼を外省人の枠だけで捉えることも難しくなった。

こうした情勢を十分理解できなかった宋美齡や、彼女になお強い影響力を信じた郝柏村らは、結局大勢を挽回できなかった。

この小説後、蔣緯國は民國85（1996）年死去、そして蔣孝武の死にともなってその健康が危惧された蔣孝勇は、まもなく喉頭癌を発病、同じ民國85（1996）年の末に死去した。こうして蔣家第2、第3世代はすっかりなくなってしまった。

（接）